

SVS Vascular Annual Meeting 2026 参加報告

筑波大学 生存ダイナミクス研究センター小泉滋樹

この度、第 54 回日本血管外科学会学術総会で「Microregional RNA sequencing を用いた大動脈二尖弁および三尖弁患者における大動脈拡張の層特異的遺伝子発現の検討」という演題にて最優秀演題賞を頂きました。患者手術検体から得られた大動脈壁を用いて、二尖弁および三尖弁に合併する上行大動脈拡大の違いを層特異的に捉えようとするもので、基礎研究に近い内容でありながら、手術検体をいかに解析していくかという点を評価して頂き、大変光栄に思います。副賞として米国血管外科学会 Vascular Annual Meeting 2026 (VAM) で発表する機会とその旅費の補助を頂きました。大変貴重な経験となりましたので、共有させて頂きます。

今年度の VAM はマサチューセッツ州北東部のボストンで開催されました。ボストンはコンパクトな都市でありながら、その周辺にはハーバード大学や MIT といった名だたる大学機関をはじめ、研究機関、製薬企業、バイオテック企業の研究拠点が密集する街です。大西洋に面して気候もよく、中心部を流れるチャールズ川沿いでは日光浴やランニングを楽しむ人々が多くみられました。ちょうどサッカーワールドカップが北米開催されていたこともあり、街全体にスポーツを楽しむ雰囲気を感じられ、活気に満ちていました。

学会は 6 月 10 日から 6 月 13 日の 4 日間開催されました。発表自体は、外科的手技に関するに加えて、PCSK9 阻害薬や抗血小板療法などに関する大規模研究など周術期管理に関わる演題も多くみられました。個々の手技の工夫も大切ですが、ガイドラインに直結しうる規模の臨床研究が活発に討論され、そのスケールの大きさには圧倒されるものがありました。

また、壇上前方に discussant が着席し、発表者を交えて議論を行う形式のセッションも印象的で、特に、学生や trainee が発表し、その指導者 (senior author) が discussant として議論を補足する形式は、非常に教育的だと感じました。日米の医学教育・臨床研修システムの違いもあると思いますが、medical student が臨床的な内容について堂々と発表し、質疑応答に対応する姿に感銘を受けました。

私は International educational session で発表の機会を頂きました。こちらは、

東理事長を始めとして、各国から血管外科の現状を発表するようなセッションです。全体として時間が押したため、最後の質疑応答の時間は残念ながらありませんでしたが、無事に発表を終えました。発表後に座長の先生と臨床応用の展望などについて議論し、基礎研究の重要性についても激励を頂きました。自分と同年代や若い日本人の先生方が、プレナリーセッションや **competition** で発表され、さらにポスターで表彰されたりしているのを見て、同じ日本人として刺激を受けるとともに、自分もますます頑張らなければと感じました。

VAM では参加登録者や発表者を検索しやすいシステムが整備されており、関心のある臨床医や研究者に連絡を取りやすい環境が整っています。私自身もそれをみながら事前に連絡をとって、第一線で活躍する先生方と学会期間中に意見交換することができました。さらに、国際学会という場を通じて、国内にいただけでは接点の少ない日本人の血管外科医とも交流する機会を得られました。発表や聴講に加えて、このような国内外の交流を通じて視野を広げることができた点も、今回の学会参加における大きな収穫でした。

最後になりましたが、このような機会を与えて頂きました日本血管外科学会の委員の先生方、国立循環器病研究センター勤務時にご指導いただきました大会長の松田先生、選考に携わられた東理事長、椎谷委員長をはじめとする関係者の皆様に心から感謝申し上げます。今回の経験を今後の臨床・研究活動に生かすとともに、若い血管外科医が早くから国際学会の舞台へ羽ばたける機会がさらに広がることを願い、私の参加報告とさせていただきます。

